

2021年度 JACET 中国・四国支部 春季研究大会研究発表題目&発表要旨

日時：2021年6月5日（土）12：50～16：50

- ・実施方法：遠隔（Zoom）
- ・事務連絡：研究大会への参加申込をされた方にのみ，Zoom 会議 ID を送らせていただきます。参加お申し込みは以下のサイトからしてください。

PC 用 <https://ws.formzu.net/fgen/S62029117/>
スマホ用 <https://ws.formzu.net/sfgen/S62029117/>

(12:50～12：55) 開会のご挨拶 支部長 岩井 千秋

研究発表題目

(13:00 – 13:25) 司会 中住 幸治 (香川大学)

発表1：Intentional and incidental EFL vocabulary acquisition in a high school learning context (高校の学習状況における意図的および偶発的なEFL語彙の習得)
SHARPE, Michael (Kochi National University)
GRANT, David (Kochi National College of Technology)

(13:30 – 13:55) 司会 中住 幸治 (香川大学)

発表2：英語での生徒のパフォーマンスを評価するルーブリックとして利用可能なアプリケーションの開発 (Development of the application software for using it as a rubric assessing student's performance in English)
中山 晃 (愛媛大学)
木原 拓海 (愛媛大学大学院生)

(14:00 – 14:25) 司会 中住 幸治 (香川大学)

発表3：中・上級英語学習者の形態素エラー：複数形態素“-s”再訪 (Morpheme Errors by Japanese Intermediate and Advanced Learners of English: Plural Morpheme “-s” Revisited)
西谷 工平 (就実大学)
中崎 崇 (就実大学)

(14:30 – 14:55) 高橋 俊章 (山口大学)

発表4：大学生初級英語学習者へのオンラインでのパラグラフ・ライティング指導ーピア・サポート活動を使ってー (Paragraph Writing Activities in Online Classes for

Less-proficient EFL Learners: Learning with Peers in Small Groups)

奥田 利栄子 (広島大学・広島修道大学非常勤講師)

(15:00 – 15:25) 高橋 俊章 (山口大学)

発表 5 : 高専 1 年生に対する体育 CLIL の可能性 (4) —英語を使用したパラスポーツの授業を事例として— (The Possibilities of PE CLIL for the First-year Students at National College of Technology Part 4: A Case of Para-sports Classes in English)

二五 義博 (海上保安大学校)

伊藤 耕作 (宇部工業高等専門学校)

講演 (15:40 – 16:40)

講師紹介 : 岩井 千秋 (支部長)

「コロナ禍の言語教育—オンライン英語授業の実践と課題—」

講師 : 森田 光宏先生 (広島大学准教授)

(16:40~16:45) 閉会の辞

研究発表要旨

(13:00 – 13:25)

発表 1 : Intentional and incidental EFL vocabulary acquisition in a high school learning context (高校の学習状況における意図的および偶発的なEFL語彙の習得)

SHARPE, Michael (Kochi National University)

GRANT, David (Kochi National College of Technology)

This presentation will discuss the interim findings of a longitudinal study on intentional and incidental vocabulary acquisition with a group (n=500) of EFL learners at an engineering high school. The presenters will detail the methodologies employed to promote vocabulary learning and the results obtained, as well as the pedagogical and administrative challenges that they have faced while implementing the program.

(13:30 – 13:55)

発表 2 : 英語での生徒のパフォーマンスを評価するルーブリックとして利用可能なアプリケーションの開発 (Development of the application software for using it as a rubric assessing student's performance in English)

中山 晃 (愛媛大学)

木原 拓海 (愛媛大学大学院生)

本研究・開発の目的は、教室等でタブレット型端末を利用して英会話など、英語によるパフォーマンスを手軽に評価し、かつその評価データを表計算ソフトに自動で統合できるようなアプリケーションを開発することである。校種を問わず、比較的大人数の児童・生徒・学生の英会話の成績を即時的に記録し、まとめることは、大変労力のかかることである。そこで、評価対象者のデータをタブレット型端末に呼び出し、あらかじめ用意してあるパフォーマンス用ループリックを用いて、英会話などの英語での活動の様子を画面へのタップ（あるいはクリック）で評価し、終了後には、そのデータを表計算等のファイルに自動で取り込めるようなソフトウェアの開発をすることにした。プログラミング言語としては、Pythonを用いることで、将来的にOSに依拠せずに使用できる汎用的なソフトウェアの開発を目標としている。なお、発表では、ループリックの内容及び開発段階のソフトウェアの操作方法を紹介するとともに、英会話など、即時性が求められる活動における評価の在り方や今後の課題について議論する。

(14:00 – 14:25)

発表3：中・上級英語学習者の形態素エラー：複数形態素“-s”再訪 (Morpheme Errors by Japanese Intermediate and Advanced Learners of English: Plural Morpheme “-s” Revisited)

西谷 工平 (就実大学)

中崎 崇 (就実大学)

本研究の目的は、中・上級英語学習者が英語の可算名詞を使用する際に複数形態素“-s”を欠落させる現象に焦点を当て、とくに“-s”の欠落が目立つ可算名詞の語彙的意味や出現環境を分析することで、学習過程で「そのうち治らない」エラーの質的傾向の糸口をつかむことにある。本研究者は、“-s”の欠落の要因を言語間の複数性の認識および表示方法の違いや義務性の有無に帰し (西谷・中崎・ダンテ, 2017)、それが学習過程で「そのうち治らない」可能性を示唆した (西谷・中崎, 2019)。本研究は、中・上級英語学習者から提供された追加データを蓄積し、“-s”の欠落を観察することで、上記の可能性を裏付けると同時に、どのような可算名詞に“-s”の欠落が生じるのかを分析した。結果として、中・上級英語学習者については、とくに日本語で数への関心度が相対的に低い物名詞、総称性を表す名詞に“-s”の欠落が生じやすいこと、また、複数マーカーを前置する名詞にも“-s”の欠落が認められることが明らかになった。以上から、「そのうち治らない」エラーの質的傾向として、母語で定着している認識方法と文法的手続きの部分重複が関与している可能性を示唆する (cf. Luk & Shirai, 2009; Murakami & Alexopoulou, 2016)。

(14:30 – 14:55)

発表4：大学生初級英語学習者へのオンラインでのパラグラフ・ライティング指導ーピア・サポート活動を使ってー (Paragraph Writing Activities in Online Classes for Less-proficient EFL Learners: Learning with Peers in Small Groups)

奥田 利栄子 (広島大学・広島修道大学非常勤講師)

一般教養科目の英語（ライティング中心）授業をオンライン（Teams 同時双方向）で行った。受講生は英語を不得意とする大学1年生であった。パラグラフ・ライティング課題を15回の授業で5回与えた。課題を提示した授業時では、学生にグループ内でトピックに関する話し合い（日本語か英語）や短い発表（英語）をさせ、その活動中に出てきたアイデアや使われた英語表現等を参考にして各自英作するよう指示した。学生はワード文書の形式で課題を提出した。その次の授業では、提出された作品をグループ内で読ませ、コメント（感想など）を記入させた。同時に、エクセルで作成した評価表（焦点は作品の構成）を用いて相互評価もさせた。文法・語法については、主に穴埋め式和文英訳問題を使って指導したが、提出された課題へのフィードバックの形で各学生への個別指導も行った。学期末に実施したアンケート調査から、評価活動を通じて「学んだことがあった」こと並びに「読んでもらえることが英作への励みになった」ことが示された。また、自由英作中心ではなく和文英訳中心型の授業を希望する学生が一定の割合でいることも分かった。

(15:00 – 15:25)

発表5：高専1年生に対する体育 CLIL の可能性（4）—英語を使用したパラスポーツの授業を事例として— (The Possibilities of PE CLIL for the First-year Students at National College of Technology Part 4: A Case of Para-sports Classes in English)

二五 義博（海上保安大学校）

伊藤 耕作（宇部工業高等専門学校）

最近、日本でも CLIL の研究が盛んに行われるようになったが、体育を対象としたものはまだ少ない。そこで報告者は、体育の授業をコアとしながら、その周辺で英語使用を試みる型の CLIL 実践研究を進めてきた。二五・伊藤（2017）ではサッカー、二五・伊藤（2019）ではバレーボール、二五・伊藤（2021）ではバスケットボールを事例として、CLIL の 4C（内容、言語、思考、協学）の分析から体育と英語の教科横断的な授業による利点や課題を明らかにした。本発表はその第四弾として、体育（ボイスパスゴール）の内容を英語で学ぶことが、内容への動機づけ、コミュニケーション能力育成、思考や協同学習の視点でいかなる効果があるかを探る。研究方法としては、山口県内の国立工業高等専門学校1年生5クラス201名を対象として、CLIL の4つの軸に基づく教材を作成し、授業案（90分×2回）をデザインした。具体的には、グループワーク、作戦タイムやメインゲームの各活動で、英語のシナリオやワークシート、“Point for English”等を取り入れ、学生が体育学習をしながら、多くのオーセンティックな場面で英語使用できるよう工夫した。アンケート調査結果、CLIL の4Cにおいて一定の効果が見られた。とりわけ、聴覚情報のみを頼りとする本パラスポーツでは、それに合う独創的なゲームプランを皆で考える必要があり、試合中の英語コミュニケーションも不可欠なことから、協力の場が増えてチームワークが向上することが分かった。

(15:40 – 16:40)

講演：コロナ禍の言語教育－オンライン英語授業の実践と課題－

森田光宏（広島大学）

2020年度はコロナ禍のため、多くの大学でオンラインで授業を行うことを強いられた。広島大学においても、教養教育英語科目は1年間全ての授業をオンラインで行なった。対面授業の予習や復習に為にオンラインを活用するブレンド型授業の経験はあったが、全面的なオンライン授業は初めてであったので、受講生と直接顔を会わせない中で行うオンライン授業の難しさを痛感した1年であった。広島大学外国語教育研究センターでは、この波乱の1年間に、オンライン授業の困難さを乗り越えるべく行なった試行錯誤を授業実践記録としてまとめ、「コロナ禍の言語教育」として刊行した。本講演では、まず、この本の中から、私たちが行った非同期（オンデマンド）型英語授業の概要を紹介する。特に、授業内の工夫として、「学習モジュール」を用いた学習管理について、また、授業外の工夫として「問い合わせ対応」について焦点を当てる。次に、広島大学の教養教育英語科目が2021年度も引き続きオンライン授業となったことを受けて、前年度から何を学び、本年度は、何をどのように改善しているのかについて触れる。最後に皆さんとオンライン授業について、情報共有や意見交換などを行えれば幸いである。